

桐きりダンス

ダンスの前身は、車くるま長持ながもち（長持に車をつけたもの）や唐櫃からびつ（カルトともいう）の形を変えて引出しをつけたものであった。

古代には書類、衣服、小物類等は竹筒を使用していた。いつの頃かは不明であるが、やがて桐を加工して長持が作られたという。近世になって大名の参勤交代の砌みぎり、衣裳入れとして桐製の長持が使用された。これらの長持は運搬の便利のため、前後に金具を取り付け担ぐようにしたり、引き出しをつけたものが考案されていた。

安政二年（一八五五）江戸に大地震があり、大火となった。その時町民は争って、江戸城前（現皇居前）に避難しようとした。神田橋は長持の山に埋まり、逃げ道を塞がれ多数の死者を出した。（当時の庶民は担い長持か、車が付いた綱で引張る長持：一説にはカラトという…を使っていた）

幕府は定を出し、長持・唐櫃の使用を禁止し、これに代る物を作らせた。引き出し式で分解して運べるダンスが作られるようになったという。（春日部地方では明治期になっても長持・唐櫃は使用されていたようで、今でも旧家の蔵の中に保存されている）この分解式「ダンス」は明治末期から、三つ重ね式も作られるようになった。明治二十年頃に作られていた型は、側面上部に金具が取り付けられ担げるようになっていた。

春日部が「タンス」の産地になったのは、江戸に集まる諸大名が調度品を納める「タンス」を製作する工匠を京都から迎え、材料（桐）の産地に住まわせたことによる。長持に工夫をこらし引き出しを付けさせた。これが「タンス」の初めと伝えられている。

これら工匠が「タンス」の技術を当地に伝え、改良に改良を加え現在の「タンス」ができあがった。

やがて桐材が地元で供給できなくなったため、会津産の桐材が導入されるようになった。春日部は古利根川・江戸川を利用して原木を集荷する便があり、古利根川は喜蔵河岸（現春日橋際）、江戸川は岩井河岸・土生津河岸から陸揚げされて運び込まれていた。

春日部のタンスの特徴は総桐タンスで最高級品である。タンスには、前桐（前面だけ）、三方桐（前面と側面）、四方桐（前後と側面）と総桐がある。総桐でも、作り方によって三分通し、五分通し、七分通し等の区分があり格付がされている。

春日部のタンスが有名になったのは、当時上町に居住した厚見重次郎という人が製品を改良して一般の業者も技術の習得につとめ、大正十年上野で開催された『平和博覧会』で最優秀賞を受領したのが契機となった。昭和二年品質保持のため組合を設立、制服の専任検査員を置き厳重な検査、出荷をしたのも大きな要因となった。タンス製造の最盛期には、町のいたる処で木くぎを打つ槌の音が響いていた。製作工程は「ノコギリ・手カンナ・竹クギ」の手仕事及要求され、タンス一棹の生産には数種の職人の手を経て、数日を要する。